

探訪

さいき切支丹ロード (二)

～morinocanpachiから

San Jose 1616

児玉潤子

(会員 佐伯市中江町)

五月二日

田中裕介先生、別府大学学生二名、津久見史談会の方二名と合流。切支丹墓探索と共に、津久見に葬られた宗麟の墓石が家臣の手で佐伯に移されたとされる天徳寺へ向かう。この予定を組んだため、津久見史談会の方に声かけした。

下直見水口の切支丹墓地で計測・撮影。埋もれていた五輪塔の一部も見つける。中世末までの墓地でもあったと確認する。

更に南側の風呂の迫の旧墓地まで足を延ばすが背丈以上に雑木雑草がはびこり、伏墓は発見できなかつ

た。

久留須川の河岸で昼食を取り、過日やはり成果の無かった毘沙門庵をやり過ごし、五十川千代見氏の地元、提内へ立ち寄る。



竹の根元にある墓石 (高月地区)



五十川氏は杖を突きながらも、数十年ぶり、伏墓のある高月という場所へ同道された。山道の入り口に数基ある墓を過ぎ、竹の生い茂る斜面を案内される。

倒木を越え、落ち葉の積る山肌を進み、竹が生え放題の山裾に、竹の勢いに突き上げられたもの、土に埋もれるもの、斜面を落ちたものなど数基を見つけた。水口の伏墓を知ると判断できるが、十字架を探す、あるいは卍の記された石造物を探す人には見過ごされることだろう。

五十川氏はつくづく「栗本（古市）の伏墓（注①）は美しかった。」とおっしゃる。

高速道路誘致、それに伴う市営住宅建設時に撤去されたとされる切支丹墓は、古市住民をそのまま城下に移住させた毛利高政とどのような接点があったのだろうか。

五十川氏ご夫妻に大いに接待され、全員はつらつと再始動。天徳寺へ向かう。

増村隆也氏（注②）によれば、義統改易後、家臣山田、小野、津崎等七人により墓石が（一説には遺骨も）佐伯に運ばれたという。

住職さんに奇妙な形の墓碑の底の部分も見せて頂く。その下の方形の石の梵字の配置なども不自然と言われていた。家臣等が尾浦などへ移住させられたり、寺が蛇崎から久部に再び移されたり、焼き討ちされたりなど謎の多い寺である。

本堂を案内された後、大友氏の遺物ではないかとされる香炉と茶碗を見せて頂く。茶碗は幕末頃オランダの都市マーストリヒトのペトルス・レグー窯(Petrus Regout)の印があり宗麟が直接かかわったとは思われない。小型の象の香炉に関しては内部の灰などの分析から時代に合致することである。

天徳寺山号についても話題になった。現在の山号は福壽山だが、『御領分中寺社記』では瑞雲山とされている。宗麟の号に似ているのでは？、と田中先生。宗麟の戒名は瑞峯院殿前羽林次将兼左金吾休庵宗麟大居士であつた。

\*\*\*

五十川氏等が探訪した切支丹史蹟らしきものの中に鶴見丹賀浦がある。昭和五十年頃はまだバス路線が

無く、自転車で行き、帰りは船で帰路に就いたと聞いている。

『史蹟名勝天然記念物調査報告書』(注③)では、「の場の禮拜堂址」として紹介されており、大正十一年五月十日の豊州新聞に「の場の寺屋敷」の記事がある。

慶安年間（1650-1674）の天草の亂に敗戦した切支丹信者の殘党は、この的場に落ち來りて潜伏し、寺院を建設して切支丹の布教につとめてゐたが(以下略)

県立公文書館にある「古社並地方ニ深キ由緒調明治四十四年 大正八年 その一」(注④)より南海部郡役所でも同様の記載をしている。

此地ハ天草一揆ノ殘党逃レテ來リ頂上ノ凹地ニ立籠リ切支丹宗ノ魔法ヲ行ヒシカ事露レテ断罪ニ処セラレタリト傳フ大字丹賀浦ノ名よつて記ル所ナリト

昭和十三年三月二十八日「大分新聞」三頁には「中浦村にキリシタンの墓 警察の注意でまた埋む」と題して以下に続く。

南海部郡中浦村字廣浦は藩政時代キリシタン信者が窃かに一寺を(當今の教会)を建設し現に寺

屋敷を残してをりきゅう舊藩主毛利子爵も郷土史家佐藤蔵太郎氏を伴ひ調査したことがあるが今回寺屋敷附近の開墾に當り五基のキリシタン墓を發掘した。なほ附近一帯に数十の墓基が埋没してゐるのを認めるが駐在所の注意で發見の墓まで再び原状に回復することになった。なほ同地は一説には藩祖高政公が當時幕府を憚はばつて公自ら僻陋へきろうの同所に一寺を建立、目養生と稱して詣で、ゐたものと云はれてゐる。

昨年十二月十二日、広浦の区長の案内で史談会メンバーと共に現地を訪ねる。数基の五輪塔は存在、かなりの急斜面。立ち枯れの状態で支えにならない幹や枝に悩まされ、滑りながら岡の上に登る。窪地は林になつており、当然のことながら、切支丹の痕跡は皆無なのである。というか、当時、私は切支丹の風習、儀式に無知であり、探索の焦点が無かつたのである。

二度目に訪れたのは三月二日。米水津古文書解読会のメンバーと出かけた。

寺屋敷とされる木村家に五輪塔自体移動したと聞いている上に、ミカン畑、その搬送レール設置、境界柵



的場の寺屋敷跡



場的窪地跡

などがあり、落ち葉の散り積もった表面からは地下の数十の墓基は探しようがないと思われ知らされる。せっかくだから、と皆さんの熱意で予定外の窪地まで上がることになった。

この日までに各地の史跡を見たり、神田さんや田中先生にポイントを教えて頂いたが、広すぎることに、時間の無さ、大型の基壇たる石も、加工された石造物らしきものも見つけられなかった。

\*\*\*

すでに知られる旧岡藩重岡の「るいさの墓」、野津からの伝播と思われる国道十号線沿いの遺跡、『海の下藤』の可能性を秘める、旧南海部郡鶴見町の口の碑が形成する、このさいき切支丹ロードにもう一度光をあてていただきたい、と願う。

\*\*\*

高政のキリスト教入信について確認できる史料がある。『ギリシタン研究第二十輯』（注⑤）、更に『ギリシタンになった大名』（注⑥）の中に、若き日の毛利高

政こと森勘八 *moriocanpachi* が生き生きとよみがえっている。以下は佐久間正訳による。

太閤は豊後国王（大友義統）を日本の最も果てに追放してその領地を没収した後信長時代の森勘八（毛利高政）という武士に、豊後にある二つの郡を禄として与えました。一つは常にその国の最も勇敢な兵のいる日田と言う領地で、もう一つは玖珠という名の領地です。前者については、彼が領主としてその産出来をことごとく己れの禄とし、後者については彼は太閤の代理人のようなものになっています。（中略）

この武士は一二年以上も前、まだ非常に若い時に大阪でキリシタンになりました。しかし勇敢な武人であつたから、常に戦場に行つていて、神の問題について殆んど知ることができず、あまりその方面に心が傾いてはいませんでした。しかし非常に優れた理解力をもつていたので、初めて聴いた教理が心に深く残り、それからあなたも説教者のようにそれをくり返して口にしていました。わたし自身はその一部分を一〇年前に下関で聞いて

感歎しました。／＼／＼この人物は性格が火のよう見え、学ぶ能力をもっています。豊後にパードレが二人いることを知るとその一人に、日本人イルマンを伴つて説教をしに来てくれ、と求めました。それが神への奉仕に叶っているからです。パードレが到着すると、大きな喜びを抱いてこれを迎え、彼自ら小姓と共に、パードレがミサを捧げるように祭壇を準備しました。そして住院のためにただちに米二〇俵をパードレに贈りました。

（以下略）

高政に受洗し、朝鮮に初めて渡つたとされるこの宣教師はグレゴリオ・デ・セスペデスである。マドリッドで保管されている書簡をまとめた著書が2015年発行されている（注⑦）。

\*\*\*

寛永十一年日本人名東次郎右衛門 *Manoel Borges* マノエル・ボルジェス、同宿の助右衛門、多兵衛と共に佐伯で捕縛、後大村へ護送、長崎で殉教（注⑧）。佐伯領内では六本松嶺でも十一名の切支丹が火刑、一名

が梟首となる。十五年の鳥原の乱や様々な迫害の中、高政の命で佐伯に教会を建立したアウグスチノ会 Heruando de Ayala de San Jose エルナンド・デ・アヤラ・デ・サン・ホセも大村で捕縛され大村湾高島で斬首される。直前の書翰(注⑨)の一部を紹介する。

私が捕らえられたり、または殺されたりする場合のために、私はこの覚え書を通して、これが御手にはいったばあでれ方にこれを利用して、実行してくださるようお願いいたします。

第一に、そして私が最も心苦しく思っていることは、私が貴師をはじめばあでれがた、及びこのキリシタン全体に与えた悪い手本です。それで、私は心から遜<sup>へりくだ</sup>って、これを書きながら目に涙をうかべて、切にお恕<sup>ゆる</sup>しを請い、私の名でできるだけ広く皆さんにお恕<sup>ゆる</sup>しを願います。

私はドミニコ会に四ターエル(注⑩)フランシスコ会に三ターエル借りがあります。私の主人の家にまだ御みさ用の葡萄酒と蠟が少しずつあります。これで皆さんに御迷惑をかけずに弁償できると思います。なお残ったものは煉獄の靈魂のた

めの御みさをあげるために使っていたきたいと思いません。(中略)

幾人かのキリシタンは、ばあでれたちは、自分たち自身はその機会を避けているのに、信者には進んで殉教をとげよと勧めると言って不平をな(ママ)らしていたのです。彼等からこの考え違いを除き、我々はその危険を恐れてはいないのだということをわからせるために、我々は彼等のためにその危険の真只中へとびこんで行くのです。

\*\*\*

卒業した高校の真ん前にあつた馬場の松の土手についての由緒を知らなかった。佐伯の六本松河原で切支丹が火あぶりになつたことも忘れている。マリオ・マレガのキリシタン迫害史に、佐伯は幸か不幸か取り上げられていないかもしれない。

過去、私たちが失つたものに素直に向き合い、受け入れ、忘れないために、負の歴史も残せないものか。人間のエラーは謙虚に反省しなければ次の展開は無いのではないか。

史談会誌で過去切支丹について史料紹介された真柴涉氏、宇土山砦を現地検証された方々の記載と重複すると思われる点は極力割愛させていただいた。なお、前回「二月二十八日」とした箇所は「四月二十四日」でした。訂正とお詫び申し上げます。

《補注》

- ① 佐伯史談 第十四号  
「古市のキリシタン墓」五十川千代見、官義雄  
昭和四十一年 九頁〜十一頁
- ② 「大分県地方史 創刊号」  
「大友宗麟の墳墓に関する研究」  
一九五四年 楠村隆也 六十四ページ〜
- ③ 「史蹟名勝天然紀念物調査報告書」第七編  
大分県史蹟名勝天然紀年物調査会編  
一九二九（昭和四年） 六五〜六六頁
- ④ 「古社ならびに地方に深き由緒調べ」  
明治四十四年 大正八年 その一」より  
南海郡都役所 県立公文書館
- ⑤ 「キリシタン研究 第二十輯」 二七三頁
- 吉川弘文館 一九八〇
- ⑥ 「キリシタンになった大名」 結城了吾  
キリシタン文化研究会 中央出版社  
昭和六二年（一九八六）
- ⑦ グリゴレオ・テ・セスペデス スペイン人  
宣教師が見た朝鮮と文祿・慶長の役」  
朴 哲 春風社 二〇一五
- ⑧ 「豊後のキリシタン教界について」  
宗麟と平信徒の役割を中心として」  
五野井隆史  
大分先哲史料館秋季企画展  
「豊後キリシタン史記念講習資料」より  
二〇〇一
- ⑨ 「キリシタン研究 第十四輯」 三六六頁〜  
吉川弘文館 一九七二
- ⑩ 十六十七世紀の通貨換算率は  
クルサド、ドウ カド、スクードはほぼ同額  
一タエルは 一〜二クルサド  
日本の銀一貫（およそ二百万円）は、百ドウカド  
四タエルは八〜十六万円ほどか